

呉錦堂を語る会通信

NO.28 Jul. 2016

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘 雄三 方「呉錦堂を語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員

発行日 2016.7.1



舞子・上ノ山（山電舞子公園駅北東）にあった呉邸

呉錦堂の自宅あるいは別荘といえば、先ず名があがるのは舞子の移情閣です。地元では、“六角堂”と呼ばれ親しまれてきました。更に、呉錦堂のことを少し深く知っている人なら、今の神戸駅近く、籠池通りにあった呉錦堂邸を答えるでしょう。この籠池通りの家は終戦の年、神戸大空襲で全焼し現存しませんが、その外観は写真で見ることができます（詳しくは、当通信第22号をご覧ください）。

呉家にはもう一つ、山陽電車の舞子公園駅の北東、すぐ近くに邸宅がありました。本第28号では、この舞子・上ノ山の呉邸について、写真を中心に紹介いたします。（編集委員 橘 雄三）

《舞子・上ノ山の呉邸の様子》

当通信第24号掲載の通り、呉伯瑄（ご・はくせん）氏は、「私の戸籍は移情閣の所在地、舞子ヶ濱2028-3で、住所は上ノ山1752-1でした。啓三郎ほか兄達もこの上ノ山の家に住んでいて、戦争もこの家から行きました。この家は敷地が5千坪ほどあって、二階建て洋館と和風家屋5、6軒が建っていました。私たちは主に洋館で生活し、和風家屋の多くは使用人の住居でした」とおっしゃっています。

また、『垂水百年のあゆみ（復刻版）』（平成25年垂水郷土史研究会）で松下泰造氏は呉邸について、「同家の住居は山陽電車の舞子公園駅の北東にあっ

た。洋風の二階建てである。呉錦堂の孫、啓三郎氏が筆者の友人であったので、昭和8年ごろよく訪問した」と記述されています。

これらの話から、上ノ山の呉家の様子が少しはわかりますが、残念ながら、今迄、具体的にはイメージできずに来ました。ところが、先日、呉伯瑄氏から上ノ山の呉家の様子がうかがえる写真を見せていただき、霧が一気に晴れました。「百聞は一見に如かず」です。これら写真から、呉家の建物の一部、庭園、ご家族の生活の様子がわかるだけでなく、5千坪とおっしゃる敷地の広さも想像できます。

呉伯瑄氏の許可を得て、以下、写真を掲載いたしましたので、ご覧ください。



玄関前集合写真（呉家の家族と使用人。背景右は洋館玄関、背景左は和風平屋）1928、9年

〔前列右から〕四男伯玉、三男伯瑞（啓三郎）、呉啓藩、五男伯球（幸五郎）、啓藩夫人、長女良子、丁祖母（呉錦堂夫人）
〔二列目〕右から3人目、佐伯あい（のち、伯瑄氏の「婆や」）、4人目、二男伯瑛（俊一郎）
左から2人目、番頭さん（菊名。二頁の写真に登場）

舞子・上ノ山、呉家の人々の生活

《主だったデータ》

- 呉錦堂 1855生～1926歿
- 呉啓藩 1894生～1936歿
- 呉伯瑄 1931生～

■ 上ノ山の土地所有

- 1906 取得
 - 1950 愛徳童貞会へ譲渡
- この間44年、呉錦堂の土地所有の最長記録です



↑これは誰？なんともかわいい
後ろはガレージ
左奥に二階建ての借家が見える

庭園で→
広いですねえ
このかわいい子は誰？



誰？ダンディですねえ
後ろは温室



← 和風平屋の前で
番頭さん

↓これも番頭さん
テニスコートで

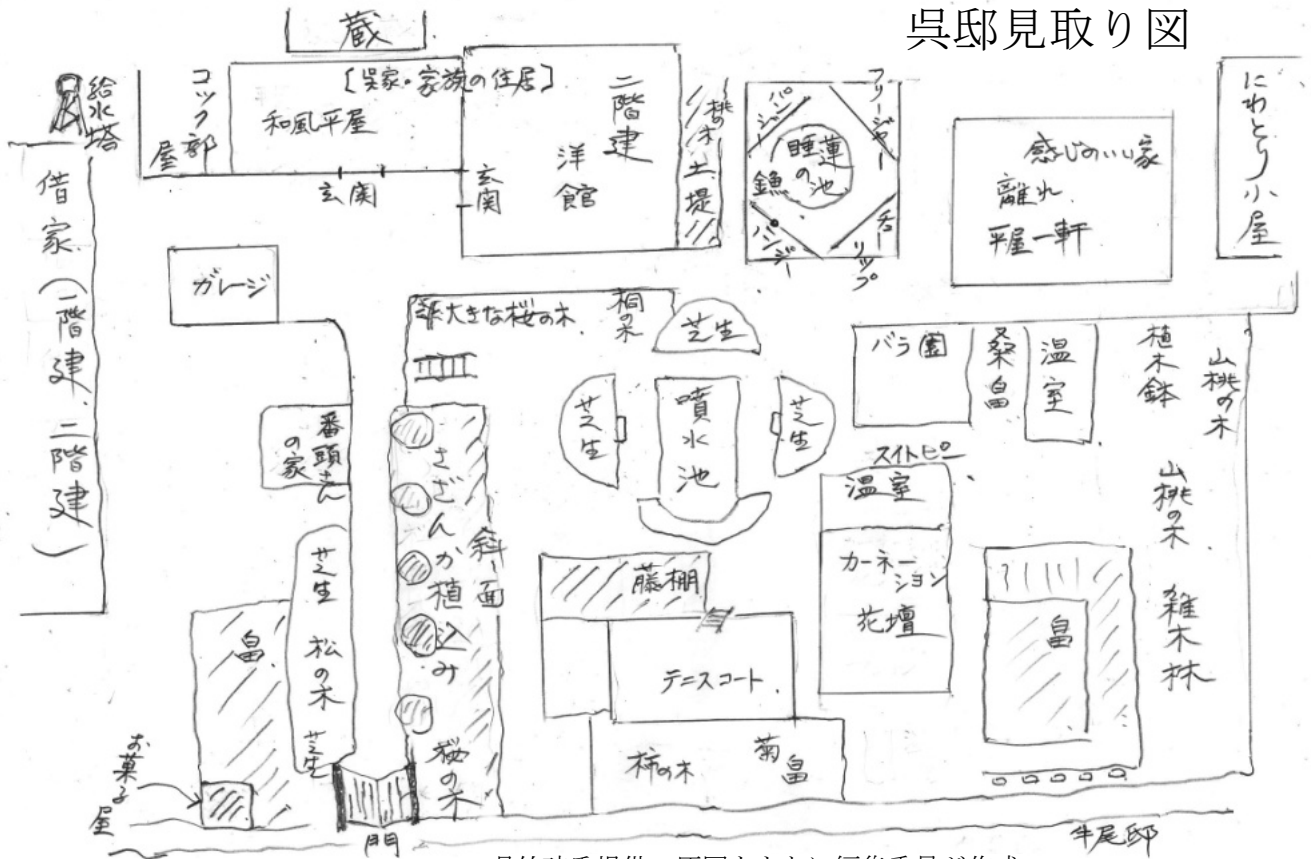


→ 自転車に乗る兄弟
誰と誰？
そっくりですねえ



舞子・上ノ山、呉家の人々の生活 (続き)

呉邸見取り図



呉伯瑄氏提供の原図をもとに編集委員が作成



噴水池で遊ぶ子供
背景右はコック部屋、背景左はガレージ
更に奥に給水塔が見える



子供二人は伯瑄さんと妹
背景、右はコック部屋入口、左はガレージ



子供二人は伯瑄さんと妹
背景は洋館

2003年 孫文が取り持った 陳舜臣×玉岡かおる 両氏の対談 於：移情閣 (孫文記念館)

中央背景は孫文胸像



移情閣3階(非公開)の対談場所
向かって左が玉岡氏 右が陳氏

昨年、2015年の1月21日、作家の陳舜臣さんがお亡くなりになりました。二日後、玉岡かおるさんの追悼文、「陳舜臣さんを悼む」が新聞に載り、非常に興味深く読みました。その理由は、玉岡さんが文中、「若輩の私が同じ神戸の作家というご縁で陳先生と対談できる幸運に恵まれた時はうれしかっ

た。2003年のことだから、10年以上も前のことになる。場所も印象的だった。神戸市垂水区にある移情閣…」と記されていたからです。両氏の対談当時、私(橘)は館の職員として、移情閣に勤務していました。以下、この対談及び追悼文について記述します。

(編集委員 橘雄三)

魂の集積文字に込め

陳舜臣さんを悼む

玉岡かおる



陳舜臣氏、後ろは王柏林氏(当時、孫文記念館副館長)

著作権の関係で新聞記事の写真に換え、「呉錦堂を語る会」所有の写真を使用しました。(2003年撮影)

陳舜臣先生の訃報。それは歴史小説界の巨星を喪った、という社会的事象であるのはもちろんだが、台湾と日本、中国や日本という未来にかかわる歴史の生き証人を喪った事実であるのも否めないだろう。

戦前の神戸で生まれ、日本人として育ちながら、敗戦により台湾へ帰属。みずからのアイデンティティーを探る心の彷徨は、著書「道半ばにも明らかなが、両方の国を愛する姿勢が、中国を舞台とする陳作品で数々の大作になって花開いた。

学生のごろ、父の書棚から盗み出すようにして読んだ『鄭成功』や『阿片戦争』は、確実に私を『歴史小説』へと育てたが、どれほど多く読んだか、授業者が陳作品で、学校の授業では学べない中国と、エキサイティングに接したことも多かった。

後年、若輩の私が同じ神戸の作家というご縁で陳先生と対談できる幸運に恵まれた時はうれしかった。2003年のことだから、10年以上も前のことになる。場所も印象的だった。神戸市垂水区にある移情閣。陳先生が『青山一髪』で描かれた孫文ゆかりの場所である。そして私も、『天涯の船』で同じ孫文を描こうとしていた。

日中談話がなごやかに進んだので、持参してきた先生の著書に、サインをお願いした。

ところが陳先生は、笑顔のまま、思案してしまわれた。何か失礼なことをしたのかと焦っているかしたのかと焦っているか、先生に付き添って来られていた奥様がおっしゃっていた。病気をしてから手が300枚と積み重なった。

自在には動かなくてねえ。そんなことも知らなくて、後はただもうあたふた。若さゆえ健康ゆえのおどりを恥じた。すると先生は、数分の思案の後に、にこやかにペンを執られた。

「このごろは、1日に書けるのは4000字。陳舜臣、と3文字、あなたのために書いたから、今日書けるのはあつと397文字だ」それは小説家という、文字で物語を築く人が、命を失ひながら記す行為だった。作品とは、4000字、90歳。陳舜臣さんは21日死去

作家の魂の集積。自身は限りある命を生きた人間ながら、生身の肉体を小説に捧げ、1文字にも言葉をそそぎこむ宿命の者である、震える3文字が、教えてくれた。

陳先生がその後も、最期まで作家として文字に思いを込められていたことは言うまでもない。今はただ、そのようにして命を吹き込まれた陳作品が、読者の心の中で永遠を生きていることのみ、願っている。(作家)

《1. 孫文が取り持った縁》

玉岡かおるさんは追悼文中、「場所も印象的だった。神戸市垂水区にある移情閣。陳先生が『青山一髪』で描かれた孫文ゆかりの場所である。そして私も、『天涯の船』で同じ孫文を描こうとしていた」と記されています。まさに、孫文が取り持った縁と言えます。

《2. 対談の場所設営に私も一役》

当時、私は財団法人孫中山記念会の職員として孫文記念館(移情閣)に勤務していました。陳舜臣、玉岡かおる両氏を案内し、応接室で、ほんの少し話をしたことを覚えています。私は陳氏を心の中ではいつも、「陳舜臣さん」と「さん」付で呼んでいます。氏の中国物は、私の青春時代から中年にかけて、「人生の手引書」でした。『中国歴史の旅』や『太平天国』などをガイドとして、中国各地をよく旅行しました。そのお礼を言ったように記憶しています。

この日、両氏の対談は移情閣3階の孫文胸像前で行われました。詳しくは、「ネットミュージアム兵庫文学館 陳舜臣館」をご覧ください。この対談は同館の企画です。

《3. “陳舜臣” サイン3文字の重さ》

追悼文で感動を受けたのは、玉岡かおるさんが陳舜臣さんに、サインを求める件(くだり)です。新聞記事原文でお読みください。

なお、上掲2015年1月23日付中国新聞記事「陳舜臣さんを悼む」の使用について、執筆者玉岡かおる氏、配信元の共同通信社、掲載紙の中国新聞社、それぞれの許諾を得ております。